

昭和四十四年七月二十三日
第一三行三種郵便（毎月一回・十五日発行）

（通第二〇八号）

慈光

第十八卷 第九号

① 撮取不捨の意義 (一) …… 近角常観 …… (1)

目 近角先生に別れまつりて (一) …… 白井成允 …… (7)

次 随時随想 …… 柳瀬留治 …… (16)

生死の巖頭 (一) …… 花田正夫 …… (18)

攝取不捨の意義 (二)

近角常觀

七 自力と他力

そこで親鸞聖人はこれを自力と仰せられた。も一つ言う
と自力と他力と二つ力があるのでは無い。人生には絶対の
他力以外は力は無いのである。然るにその他力を知らぬ者
が、自分の思いで行けると思うて居るものが自力である。
故に自力は思うて居るまでで、本當にそういう力があるの
ではない。これは自力他力の伝承された歴史から見ても、
竜樹菩薩の言われた他力は、力の強いものは自力で行け、
羸弱怯劣の輩は他力による外ないでないと、むしろ本義
は自力であつて、他力はそれで行けぬ者のためとよようにあ
る。ところがそれが時を経て親鸞聖人に来ると

仮

聖道権化の方便に 衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる 悲願の一乗壽命せよ

全体、聖道自力などと、そういう道が本當にあるのでな
い、権化方便の道であつて、出来ないことなのである。し
かるにそれから離れることが出来ないでみんなが悩んで居

るとの御言葉である。故に未だ他力にめざめぬ人間が、出
来もせぬ小さな力を振り舞わして力んでいるものが自力で
ある。いわば、我が身知らずとか、我慢とかの言葉が自力
である。

ところがそれで、たとへ死んでもやると力んでいるとこ
ろへ、一方から、そうやってみても、それが何の甲斐も無
く終つてしまふところが可愛想故、その者を哀れみ悲しみ
何処までも捨てぬ、この悲願の一乗に遇ふもの故『有難い
今までそういう深いところを見て下された御真実とは知ら
ず、自分の我慢で力んで居ったのが申しわけがなかった』
と。で今まで自分の真面目というところより押すと『たと
え一身を投げ出してでも真実にやる』自力は、すこぶる善
かつたのであるが、一度この絶対他力のお慈悲に遇うと
『そういうように自分の自力で力んで居ったのが悪かつ
た』と、勿ち電灯の消える如くに他力に一転してしまうの
である。

近頃はとかくに社会の各部分に、各自が自分の方が正し
い／＼と、互に自力で突っ張り合いをしているものが此頃
の労働問題である。これが各自にそう言うように自分の思
惑でやれる／＼と居るの、それでやれぬを見て下
さるお慈悲の下に頭が下りて、恐れ入りましたとなつて来
なくては、調和の時が来ようはずはないのである。これは
言うてる私自身がうっかりすると『この他力がよい』の自
力を主張することになるから、そこは見て下さる方で注意
して頂かなくてはならぬ。みんなが自分の方が悪いとは思
えぬから、身体が疲れようが、滅びようが、何処までもや
ると思つて居るのである。ところがそういうように思える
そこに真の意味からは間違いがあるのだから、そこに注意
しなくてはならぬ。

八 他力の罪惡観

そこで他力の罪惡観なることは、……罪惡観は信仰とい
うと同じで、我々の自分の頭の下がる場所である。所謂機
の深信で、他力に於いては最も肝腎のところである。……我
我が自分で悪いと思ふことから出て来るのでない。この他
力の恵みが来ると、ひとりてに分つて来るが罪惡観である。
それを何か悪いことでもしたら、自分の悪しさが分つて
信仰に入れようと思ふ人のあるは間違いである。この間も
或人が『自分の醜い姿を見せて貰いました』といわれたが

この一言が価値がある。誰として自分の顔は見えぬから、み
んな綺麗だと思つて居る。監獄の囚人は自分の悪いことを
知らぬから、改心とは何を意味するかと思つて居る。『松
影の暗きは月の光かな』光が来るところで、暗いことは分
つて来る。故に我々が自分に行き詰つていて、なおそれで
やろうと思つて居る。それに呆れず真実にして下さること
が現われて来るところで『自分の思惑が悪かつた、申訳な
かつた』と分つて来る。それを大低の人が『まだ自分の煩悶
のしようが足らぬから』という風に思われるは、それは私
の書き物にもそういう風の誤解を与える点がある。私が苦
しんで信仰に入ったというから、あのように真面目に苦し
みてこそと、そう取られるは無理ない。故に中には氣の毒
な程苦しんでいて『まだ煩悶が足らぬから』と言われる人
がある。

それはまだ道楽のしようが足らぬから親の慈悲が分から
ぬというと同じであつて、甚だ変なことになる。それが何
か信仰を、煩悶でもして磨き出すが如くに思つて居るから
それになる。こは信者の人でも、我身の悪しさが本當に分
かると、お慈悲がそこに閃き出すものの如く思つて居る人
がある。故に最後の断案を下すと、
我々それで何程苦しもうが、求めようが、何時までも何
うにもならぬのが、我々の炭の塊、鉄の性である。仏性な

ど、何んなことがあっても、我々の内にあること無い。

そこは恰も糶種を煎り焦すが如し。しかし如何に焦げついた炭にも火をつけることは出来る。炭から火は出せぬが炭に火をつけることは出来る。

それはこちらが限りなきマイナスの炭故、その炭が気の毒と、そのマイナスを何処までもお見捨てなきお慈悲の火のプラス故。

ところがここをみんなが、自分で何かもってきて、自分のマイナスがプラスになることのように思うから取れぬ。この間も或青年が、自分が悪い／＼と苦しんで居るのに對し、友人が『君のその悪いのを恵んで下さる慈悲』というすると『イヤこれ程悪いところへ、この上恵まれたりすると、猶こまる』と。それは此方が借金で困って居るところへ、なお金を呉れたりすると、よけ借金がふえて困る、にとるからそれになる。

ところが、今他力は、此方が限りなきマイナスで渴し切つて居るところへ、その渴くのが哀れとの真実の水を無限に差し向けて下さるがプラスである。

我々は濁り水である。私は清浄の水である。私の清浄の水を貰えば、此方の濁りが清らかになるのだと、ここをそうとるから分らぬ。清浄とは、我々の濁りと対比して言う言葉ではない。綺麗などは、如何なる清らかな水でも、我

九 心底に隠れて居る思想

以上は大分客観的な言い方となったが、なお青年の方には、私自身は子供の時から聞き慣れて居たから分ったかも知れぬも、我々には分りかねると言う人があるかも知れぬ。私自身が矢張り長らく自分を犠牲にし、自分で真実にして行くと思つて居つたのであつた。故に私も自分の穢い方は初めからは分らなかつた。至誠でやれば至誠で通るから何程人が悪く思おうと、此方からはそれを悪く思はず至誠にやると、それでやって居たのであつた。処が此方が誠にする程に人は誠にせぬ。人の面白くないことが段々多くなつてきた。

『人は自分を輕蔑して居る』『人は冷やかなものである』『これでは人の埋め草にされてしまふばかりである』と、無暗に人が／＼ということになつた。ところがも／＼私の理想が敵を愛するにあつたのである。然るに現にかく人を悪く思ひ出したの故

『これは自分がおかしい。これでは今までのが犠牲的に献身的になど、皆うそであつた』と。

これで私は苦しみ出したのであつた。現にその時、母は言うてくれた『お前は今まで、やれるだけやったのだから悔まなくともよいでないか』と。言われて見ればその通りである、けれども私の『今まで自分がやれると思つてい

々の濁りの中には入れれば、濁されてしまふにきまつて居るのである、けれども如何程濁されても、その濁す性が衰れと、其性をしりぞけず、無限にその者に入り込もうという実意が綺麗ということである。

無欲とは、欲の深き者に如何程でも施しをしてくれるということが無欲ということである。故に如何程でも無限にされるの故、如何に濁り水の我々も、終に同化され、浄化されてしまふ。

ところが、これいとまた『今はいかぬけれども、漸々に』と、そういう風に取られていかぬのである。

以上要する処、我々何処までも責任を立て、真実にしてと言つて居るのであるけれども、それが本当には出来ぬと申したのである。

然らば、出来ぬと、唯つぶしただけか、否、その『出来ぬ、いかぬ』をしりぞけず、それを何処までも引き受けようとの御真実である。故に信仰問題でも、皆様が頂けぬでいかぬと言わるるを、それをお慈悲は、いかぬとしりぞけらるるので無い。『そのいかぬが気の毒故、その汝を何処までも見捨てぬぞ』故に、徹底し、喜びて信仰に入るのでない。喜べず、徹底せざる罪惡の塊りの、消極の我等が、それをお見捨て無き大悲の積極で、遂に積極にされてしまふのである。

たそのものが、こうなつて見ると、みな人に見て欲しいため、褒めて貰いたいためやつて居たのであつた。こんな穢い心でやつて居て、人を腐敗して居ると言つて居た自分が腐敗して居たではないか』となつて来たのであつた。

こう言つて、またそうならなくてはと取られるか知らぬが、そうとられてはいかぬ。『成程、自分等』と、ここは皆様の御同感さえ得ればよいのである。

そこで私は、自分が真実にされると思つて居た間は、努力が利いたのであるが、その私の真実はみな名利となると、もう仕様がなない。然し、自分の本當に仕様がなないことは矢張り分らなかつた。矢張り、どうかしてよくなりた、い、よくなりたの思ひがあつた。善くなるにはよくせねばとなるが、その善くが、私の皆名利となつて、ここがグルグル廻りとなつて、もう仕様がなない。『悪くて困る、困る』と、ここからどうしても出ることが出来なかつたのであつた。

それは人間に一つの妙な性がある。『悪くてこまる』という裏には『こんな心で人に向つと、あんな悪い奴はいかぬと、必ず人にしりぞけられる』と。言葉にこそ出さぬが心底にみなこれがひかえて居る。新聞に悪口書かれるのがイヤなのは、本當に悪ければ書かれてもよさそうなものであるに、矢張りそれがいかぬのは、世間一般からも悪く

思われてしまうのがいかぬのである。

又、本当に悪くなかったら、それでも書かれてよさそう
なものであるに、矢張りそれでも悪く思われたくない。人
生の曲折まよひまがひ、みなこの人に悪く思われたいところから起
こつておるのである。

ある真面目な方が、私共の一生懸命はまるで芝居のよう
だと言われたが、そこになると本当に我々は、このよく思
われたために、血眼ちまなこになって骨折こせつて居る。故に悪く思
われたとなつたら、それこそ我々の致命傷さいめいしやうである。故に新
聞屋はそこをうまく利用する。それは世間であるが、道徳
においても、矢張りこの悪く、はいかぬが道徳の根柢であ
る。そのいかぬは、結局、たれかに、あいつはいかぬとさ
れてしまうから。故に小供の時より『そんなことすると人
が笑う』で私共は大きくなって居る。昔の借用証文に、返
却されぬ時は、衆人公座の席にてお笑い下され度く、があ
るが、昔の人の廉潔れんけつなど、みなこの笑われたくないため
あつたかも知れぬ。そこになると今日でも評判が欲しいた
め、政治、宗教、乃至今日の色々の思想運動などやってい
るのかも知れぬのである。

十一 私が眞実に気のついた順序

そこで私は、一面人によく思われているのが苦しい。前
ならばよかったかも知れぬも、こんな穢けがい心でやって居つ

そこで私は、これ程に冷く、穢けがい、不実な自分であるが
この冷いの同情して、こちらはこの性分故に刃向つて行
くが、それに悪く思わず、しりぞけず、飽くまでも見て
くるる友人が一人あるならば、立つ瀬たつせがあるうと、これに
なつて来た。言いかえれば、右も左もみな敵の、この冷い
心細い人生に、私がこの性分故、皆遁ひそけてしまふが、誰か
一人『それは分っている。よく理解する故、同情こそすれ
しりぞけはせぬ、言いたいことは何なりと出し給え』この
友人があれば生きて行く瀬せがあるうと、かく言えばよく分
つて貰もらえようと思う。

これが、本来私は人生を超越したものであるが、余りに
懸かけ離れてる故、私はむしろそういう風に思つていったと
申すのである。そこで気づき出したが、それが仏であるこ
とであつた。

それまで思つていた私は、生きた問題に触れなかつたが
その時気がついたは、私は悪人をたすけるといふが、今私
が如何にもしどとく、何程受けいれまいが、それにあきれ
ず、その仕方のないが可哀想と、この私が人に相手にされ
ぬ処を見て下さるうとの、極まりなき眞実の友人が、仏で
あつた、と、これであつた。

ところで、かく言つと青年諸君は、ここで『その仏が何
処に在る』と言いたくならせぬか。それは、今私が火を押

たのを真面目など思われていて実に苦しい。出来るならほ
めてくれる人の前に、こんな穢けがい心であつたと出してしま
いたい。しかも出すと『そうか、君そんな心でやって居つ
たのか』となると、もう取り返しがつかぬと、ここが頗る
おかしい状態であつた。それで結局、何を求めて居たか。
悪いと出すと、悪いはいかぬとしりぞけらるる故、それは
立たぬが『我は君のその悪いのを同情する故、悪いを悪い
としりぞけぬぞ』と、この同情が欲しくてならなかつたの
である。

これは分りよく言つと、我々の信仰問題でも、信仰が得
られぬと必ず人がいかぬと言つと、この思想しかないので
ある。そこで何程求めても善く出来ず、得られぬのである
から、そのために立つ瀬たつせがない。故にそこへ、その得られ
ぬを悪く思わぬ、とのおまことさえて来て下さればよいの
である。こは実は私が人にそうしたかつたのであつた。何
処々々までも人の悪しきを悪く思わず、敵を愛し、眞実
でやり果したかつたのであつた。ところが、それが此方が
敗けていかぬようになり、囚人を感化せんとして此方が囚
人になる。やりはたせばよかつたのであるけれども、言つ
てる自分が、人が人がといふことになり、出来ないことに
行き詰つてしまつたのであつた。故に人間の思惑は出来な
いとのことに棒折ぼうせつてしまふのが他力である。

しつつけようとして居るに、その火が何処にあるというよう
なものである。今私が斯く申上げて居ることが、仏の御心
なのである。

(未完)

法然上人語録

近來の行人、觀法をなすことなかれ。佛像を觀ずとも、
運慶、康慶が造りたる仏ほどだにも、觀しあらわすべか
らず。極樂の莊嚴を觀ずとも、桜梅桃李の花菓ほども、
觀しあらわさんことかたかるべし。(常の御詞)

觀仏三昧は殊勝の行なりといえども、仏の本願にあらす
故に付屬せず。念仏三昧は、これ仏の本願なり、故にも
つて付屬す。(選撰集)

淨土の教、時機を叩きて、行運に当たるなり。念仏の
行、水月を感じて、昇降を得たり。(選撰集)

いけらは念仏の功つもあり、しなは淨土へまいりなん。と
てもかくても此身には、思いわずらう事ぞなきと思ひぬ
れば、死生ともにわずらいなし。(常の御詞)

近角先生に別れまつりて(一)

白井成允

(編者註) この原稿は昭和十六年十二月近角先生がお亡くなりになって間も無く、白井先生がお別れを惜しまれての一篇であります。白井先生のお許しを頂いてここに再録させて頂きました。

近角先生御逝去の報を得て私の胸は塞がった。二三年或はこの日に遭うべきを想わぬではなかったけれども、昨日今日とは考えなかつた。それが突然来た。私はすぐにも御霊前に参つて額ずきたかつた。公務の御暇を得て此の願いを果たし得たのは既に七日の御葬式の朝であつた。

おごそかにしてしかも懐しき限りなき会館の御仏座の前先生がいつも和やかに坐して法をお説きくださった処、其処に先生は既に御靈柩の中に鎮まり坐すのである。後には仏座の御扉開かれて尊像より放ちたまう尽十方無碍の光明かがやかである。前には先生を慕いまつる御同朋達の涙を示して香華しめやかである。その香華の中に匂仏上人の色紙が限りなき御感懐を告げておられる。

り申われる人々の列が時を経て続いた。やがて御柩の発たるとき時がきた。その前に最後の御姿を拝ませていただいた。いつもの黒の御衣を召し、珠数を御手に合掌したまひ和やかに円かなる御相が短き白き御髻を以て輝いておられる。顔容端政たぐいなし、精微妙軀非人天、南無阿弥陀仏々々々々、皆々涙に咽みながら御見送り申しあげた。

私が近角先生に初めて御目にかかつたのは明治四十三年の晩秋、東京帝国大学第二学生控所に於いてであつた。その頃私は、かつて其に依つていた論語の「天」に満たされず後久しく通つていたキリスト教会に説かるる「愛の神」に安らいを失い、自ら何の為に生きているのかを疑い、渾沌として迷うていた。まことに幸にして恩師三好愛吉先生の御勧めに由りて、始めて近角先生の御教を承るに至つたのであつた。そのとき三好先生はあらかじめ私を誡めてくださった。それは近角先生は何時でも同じ一つ事ばかりを話される。一年聞いても二年聞いても常に変わる事が無い、その同じ一つ事を聞いて／＼聞きぬくのだ、暫く聞いてもうわかつたなどと早合点したり、つまらないと慢つたりしてはならない、五年でも十年でも同じ事を説いて下さる人こそ真実の師匠で、世間に稀有な方だと知らねばならない、ということであつた。三好先生のこの御誡めはそ

常観御房を泣哭す と題せられ、
残る我 寒し浄土へ 足早に
とよまれる。まことに感慨窮まり無し。仰いでただ念仏もうすのみである。

応接室は昔のままに懐かしい。其処で奥様や常音先生や旧き新しき御同朋の方々に御目にかゝるのも心しめやかである。不図私はこの室の壁に私の今まで目にしなかつた短冊を見出した。

あともどり／＼して辿るらん

かいなきことに心まよいて 常観

とある。此を誦している間に私は先生を貫く情熱に襲われるような感かして胸がせまってきた。この歌を私は先生の御作と思ひ、且つ「辿るらん」を「辿らん」と読み違えて種々感慨にふけたのであつたが、これは「辿るらん」であり且つ古歌であるという事を後に信友から聞いた。御葬式は極めて蕭やかに和やかに恭々しく行われた。参

の後三十年、私の肝に銘じて忘れ得ない所であるが、それはまた如何にも深く近角先生の純粹無雜の信、至誠一貫の行を見抜いて告げあらわされた語とおもわれる。

かつて多田鼎先生が語られるのを聞いた。近角先生が鹿兒島の別院で一週間ばかり法話をせられた。一老婆がこれを聞いて後に、あのお方は文学士であられるというから、もつと奥深い道理をきかせてくださることと思つていたら毎日々々阿弥陀様のお慈悲と、天皇陛下が貧乏な者をお濟い下さる話とばかりして、他には何も無かつた、と驚き顔に語つた。近角さんは真に純粹な信心一つに生きておられる人である、云々と。

二三年前の事であつた、神戸の信友井上善右衛門君の語るを聞いた。君はかねてから一度近角先生の御法話を承りたいとの念願から、某日上京して日曜の御座に参つた。そして先生の信樂あふるる御相を拝し、御話を承り、真にありがたく心満たされて帰つた。その時承つたのは歎異鈔第九章の御味わいであつた。それに大層ありがたい譬を語つて下された。それは洪水に襲われて着物も住居も奪われ困つていような人民を陛下の宏大無辺の大御心から勿体なくも賜物をたまわつてお濟いくださる、その賜物をいただく心はどんなであろう、という綿密な御味わいであつた。

そのお話の一語々々がいかにもありがたかった、云々と井上君は告げてくれた。私は驚いた、それは私が二十余年昔にくりかえし／＼先生から承った所に他ならない。然しそれを先生は今日始めて語るかのように鮮かな歡喜の御情を以て語っておられた。それでは、一つ事を聞いていつも珍らしく初めたるように信の上にはあるべし、という教が、先生にありては語られるのに然様であられたのだと井上君もまた驚いたことであつた。

私は大学の学生となつた年の暮から大正八年東京を去るに至つたまで略十年間ばかり、うち続いて先生の御教を承つた、のみならず心身の苦惱について一方ならぬ御親切をも蒙つた。又大正十一年以後数年間、仙台求道会で毎学期三晩づゝ御法話を承ることもできた。昭和二年に朝鮮に移つてからも時々上京の機会に親しく御目にかゝることが出来た。其等の思い出は限りなく、到底筆に尽すことはできない。今僅にその二、三を記して無窮の鴻恩を偲ぶ縁とするに止める。

近角先生の御教を蒙るようになって私は始めて歎異鈔という書のあることを知つた。先生の御法話を承りながら歎異鈔をひもときつゝ、それでも何の事ともわからず夢中に

迷つて歳月を経ていた。その或る時はしなくも浄土の慈悲という言葉が私の心を描えた。

信する者をば之を救いて神の限りなき榮光を樂しましめるが、信せざる者をば裁いて之を地獄に下だし、消えざる焔を以て焚く、というキリストの天国観に所謂愛の神を疑いて教会を離れた私にとつて、六道四生いすれの業苦に沈めりとも神通方便をもてます有縁を度することが出来る浄土の慈悲は、何と有りありがたい事である。それによつて私はじめて亡き母と共に同じ境に相見ることが出来るのである、こう思つて私は浄土にあこがれた。

何のために生きるのかという久しい疑いはおのずから解けて、ただ浄土に生れるために生きる身であると思われてきた。それならば如何にして浄土に生れ得るか。ただ信心一つに由る。私は信心を得ねばならない。こうして私は信心を得んがために日曜毎に先生の御法話を承ることに努めた。

然しそれは極めて難い事であつた。先生のお話は何時間いても同じ事である、同じ教を同じ一つの先生の実験と、同じ二、三の譬喩とで繰返し語られるばかりである。私はそれを聞きおぼえてわかつてしまつたようでありながら、しかも如何にしても真には聞き抜くことが出来ない。信心が得られない。

焦燥しながら思うより、これは私が不真面目であるからだ、もし一日でも真面目になり得たら信心が得られる筈である、私はどうかして真面目にならなければならぬ、真面目になつて御教を聞かねばならない。然し真面目になるといふことは何と難い事であろう。私は日曜毎に、今日もまた真面目に聞きとおすことができずにしまつたという歎きを繰返しながら、それでも先生の誠心一つに捕えられ、先生の際もなく和やかにして、上もなく蔽をかた徳に懐かれて、御教を聞かすには居られなかつた。

先生の御法話の後に往々座談会が開かれた。その席では信仰の告白だの、求道の質疑だのが為された。質疑に対する先生のお答は懇切丁寧を極め、質問者の問おうとする所を却つて先生の方から予め見抜いて深い同情を注がれ、厳しい批判を下されるのであつた。話が徹じないとなると先生は信の灼熱せる鉄塊とでも云うべき姿になり、畳をたたき膝詰めに攻め寄つてこられた。(私がお聞きした初の頃にはまだ今の会館は無く、今の学舎の地に、かつて島田蕃根翁の住せられたという古い二階建の長屋があつて、その下の座敷で御法話が為されたのであつた)質問者は自らどうすることも出来ない窮地に追い詰められて降伏するより他なかつた。それによつて数多の人々が疑を除き信を獲て新しい生活に入った。その入信の告白はしば／＼法悦に歎

喜踊躍する相を以て為された。或日曜などには(これは既に今の会館の事であるが)、先生の御法話が終つたら突然一人の兵士が立ち上つて、自分は今まで仏法の話の聞いたこともなかつたのに、今日初めて先生のお話を承りはしなくも仏様のお慈悲を知らせていただいた、こんな不思議なことはない、と歎歎しながら讃嘆した。こんな尊い人々の姿を見るにつけても私は三年も、四年もお聞きしながら徹し得ない自分の不真面目を歎いた。

遂に或る座談会の席で私はもうたまらなくなつて私の不真面目を訴えた、不真面目の故にいくら聞いてもお慈悲はつきりしない、信心が得られない、その苦痛を訴えた。

先生は溢れるような同情を寄せて告げてくださった……

君は真面目になつたらお慈悲が聞こえるのだ、信心が得られるのだと思つておられるけれども、そんな事を私が何時語つたことがあるか。自分の真面目で仏様の信心を掴もうとでもしているのか。自分の真面目で掴み得るような信心ならば、それはまた自分の心と一緒にどうにでも移り変わるものだろう。そんなつまらない信心など得て何になるか。いったい君は真面目になつて／＼と思つておられるけれども、君が自分で真面目になり得るのか。仏様は君に向つて真面目になれ、真面目にならなければいけない、などと言われはしないではないか。むしろ反対に、仏様の御心では、君が

いくら真面目になろう／＼と思っても駄目なのだ、とても真面目にはなれないのだ、真面目になれないのが君の本性なのだ、その本性がいかに／＼可哀想でたまらない、と行って、君の真面目になり得ないその処に何処々々までも同情し、飽くまでも救うぞと呼んで下さるのだ。真面目になつて信心を得よと言われるのではなく、君がどうしても真面目になれない者だと見抜いて、その真面目になれない君の姿にどこ／＼までも同情して捨てず、必ず救わずには措かないと、かゝりきつていて下さるのだ、仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられ、罪悪深重、煩惱熾盛の凡夫を救わんと願うて下さるのだ、君はこの仏の本願を聞かずに、自分の思いで全く逆の方に向いているのだ、……。

凡そこのような事をそのとき先生は厳しく告げてくださった。私はそれをお聞きして、今まで自分の思っていた所が全く逆であつた事を知つた。真面目になろう／＼といくら努めてもどうしても真面目にはなり得ない自分の本性に始めて眼がさめた。こんな不真面目な者でないながら、真面目になろうなどとする事が身の程も知らぬ甚だしい驕慢なることを覚えた、そしてかゝる不真面目な者を不真面目なるが故に飽くまでも救うと呼ぶる無限のお慈悲を聞いた。ただ私は極めて鈍感の性である。だから私の聞法のたど

のようである。私もまた先生の御教に導かれてる限り、お慈悲一つを聞き、お慈悲一つに充たされて、不真面目な私、罪業にばかり溺れる私を飽くまでも哀れと呼んで下さる本願を聞くより他に何もいらぬことになつた。ところがたま／＼こういう事が生じた。……

私は東京の大学に入った年の晩秋に初めて近角先生に目にかゝつたのであつたが、その年の暮になつて又初めて島地大等先生のお宅に、故郷を同じくする関係から、訪れるようになった。そして其の後、私にとって、島地先生は私の心をも身をも学問をも生活をも家庭をも、すべてを導いて下さる程に極めて深い御縁の恩師と仰がれるに至つたのであるが、その島地先生の御宅では毎月一回私共同郷の学友のために土曜会という極めて親しみのある家庭的の集いを開いてくださった。それは初は故郷を離れている私共学生達のために故郷を偲ばせ親しませ慰めて下さる意味のものであつたらしかつたが、何時とはなしに先生から親鸞聖人の信仰を聞くという意味が中心になつて開かれるようになった。

その頃——私が既に大学を出て研究室に勤めていた頃の一晩、その会に於いて私は近角先生からお聞きした一つの譬喩をそのまゝに（私の思いでは）語つた。——信仰を得たからといって煩惱が無くなり徳が高くなると期すべきも

りに於いて此の極めて重大な事が何時の事であつたのかも記憶に存せず、又その時直ちに信心歡喜という程に強い感激に入つたのでもなかつた。ただ確かな事は、その時まで焦り求め來つた心の煩悶が、その時から解かれた、そして不真面目が氣にかゝらなくなつた。不真面目な自分の姿が現われるとすぐにお念仏が現われて下さる、こういう如何ともすることのできないあさましい自分の苦惱を飽くまでも知ろしめし懲みくださる限り無き御涙がおのずから感ぜられてくる。これは今日の私にとって——年々歳々あさましい罪業を造り出し積み集めて齡と共に愈々悪を増し來つた私にとって——限り無くありがたい事であり、全く唯一の救いである。この私の永遠の生命にとつてこの上なき救いの道を私は近角先生の御教によつて開いていただいた。これ真に謝しても／＼謝し得られぬ鴻恩である。

然るに上に記したように私が親鸞聖人の教に心を牽かれるようになった強い御縁は浄土の慈悲という事であつた。私は稚くして別れた母を恋慕う心からその充たされるという浄土にあこがれたのであつた。ただ近角先生は歎異鈔を講じてくだされながら、浄土について特に語つて下さるといふことが無い、先生はいつも、ただ煩惱罪惡の吾等を懲れみて捨てたまわぬお慈悲を聞かせて下さるばかり

のでもない。譬えば、稚い時から跛の娘がいる、娘は自分の跛の姿を悲しみ怨み悩むだろう、然しその娘が何かの機から母親の慈愛に触れる、母親が自分の跛の故に自分では思いもよらなかつた程に深く／＼自分の身の上を案じ煩い悲しみ痛んでいくれる、その母親の熱い慈愛を感じる、そうすれば娘の心はどうなるだろう、今まで自分の不具を怨み歎いてばかりいたのであるが、その不具の自分故に自分にも勝りて泣いていく下さる母親の涙に潤わされては、もう何も怨み歎くに及ばない、ただ母の慈愛一つに充たされてしまつて、不具なるにつけても愈々ありがたい親心に慰め安んぜしめられてしまふではないか、だからといってその娘の跛が母の慈愛で治るのでもない、治らないまゝで治らないにつけても母の慈愛に腹ふくれて安んずるのである。恰もその如く、仏様のお慈悲を聞いたからとて自分の罪惡煩惱が無くなるのではない、依然として罪の身でありながら、煩惱に迷いながらただお慈悲にまかせるばかりである。

凡そこんな話を私は土曜会に於いて皆に向つて述べたのであつたらしい。然るにこの話が源をなした事かとおもわれるのであるが、とにかくその後暫く経た一日、島地先生は突然私に向つて、前田慧雲和尚にお伺いしてお話を聞いて来いとおっしゃつた。何故にか、何の話を聞くのかをも

告げず、ただ聞いてこいと仰言った。私はそれで奇異な感を懐きながらも前田和上を訪れた。

それは大正六年九月三十日の夜であった（この月日は前田和上の日記から知らせられているのである、前田慧雲全集第八卷一七八頁にその懐かしい記がある）その夜、更深くるまで静かに／＼和上は私に浄土真宗の根本の御教を告げてくださった。私はその夜の如くしみ／＼とした心で潤い深い教の中に浸されたことがない。私は今ではその夜の和上の御教の内容を殆ど忘れてしまった。然し唯一つ忘れられず確かなことは、その夜の和上の御教を貰ったものは次の如き一事であったという事である。即ち——親鸞聖人の教は浄土の真宗である。その教を聞く者を浄土に往生させてくださる御教である。如来の本願というも、仏の慈悲というも一に是れ罪惡煩惱の吾等凡夫を浄土に往生せしめ成仏せしめずには措かぬというのである、若し念仏の信を得たと思っても浄土往生という事が確かでないならば、その信は未だ真実のものではない、たとい一時はお慈悲に踊躍歡喜するが如き事があっても、浄土往生の念が確かりしていない限り、何時かまたその歡喜も夢の如く消え去り、その信も崩れるに至るをまぬかれないであろう、吾等を浄土に往生せしめずば止まぬというのが御本願の本旨なのであるから、それを心に入れよ、——という一事であった。

然るにそれから三、四年の間、私にはどうも解けない謎のようなものが時々胸中に徂徠するに至った。前田和上や島地先生がかくまで深く憂いてくださる浄土の往生という事を近角先生は何故に語ってくださらぬのであろうかという疑いであった。

やがてその疑いの全く解かれる時が来た。仙台に針生徳治郎という篤実な方がおられた。祖先以来お東の御門徒で、別院の世話方をしておられた。真面目に道を求めながら、常に易往而無人の聖語を己れに当て、自分はその無の方に入る者ではないかと歎いておられたが、たま／＼直腸癌の手術を受け、余命いくばくもなしとさとりて後、終に他力廻向の念仏を喜ばれるに至った。平生から近角先生を慕っておられたので、先生が仙台求道会に参られる時を待ちに待って最後の御法話をお聞かせにあずかりたいと請われた。

私は先生のお伴をしてその病室に参り御法話の席にはべらせていただいた。聞く針生さんも、語るる先生もこれを最後という悲痛な境地に居られた。私ははじめお伴のつもり、傍聴のつもりでいたのであったが、いつの間にか先生のお言葉に引入れられてしまつて一語々々深い感激のうちに聞き終つてしまった。それは凡そどのくらいの間であったのかさっぱりわからない、ただ夢中になつて聞き終つ

この前田和上の御教は私をしみ／＼とした深い心に安らわせてくださった。夜更けの路を静かな喜びに充たされて宿に帰り、私はさらに前田和上と島地先生との御二人の私に注いでくださる限り無き恩愛に泣いた。

こうして私は、私をかつて歎異鈔にひきつけてくれた浄土の慈悲という言葉、今は単なるあこがれとしてではなく、弥陀仏の本願から恵まれ与えられる事実として、ありがたく味わわせていただくようになった。前に述べた跛の児の母親の慈愛は、これを感じた児にとってはそれだけですでに充ち足り、跛なればこそ愈々深く母の愛を知り味わい得るので、その跛が直らなければ母の愛が味わわれないなどという事でないのは云うまでもないが、然し同時に母親の心の念願はどうかして児の足を健やかにしてやりたいという事に存せざるを得ないであろう。その如く吾等を浄土に往生せしめ円かに成仏せしめんとするのは仏の念願であられる、煩惱罪濁の凡夫を慙れみたまわる慈悲の本願の自然であられる。このやるせなき本願力の成就の故に吾等はその仰せのままに、浄土に往生させていただくのである。今生には跛のまゝで安らい得、来生には浄土にして健やかな足を得て働かせていただくのである。しかしてこの始終すべてこれ弥陀の誓願にたすけられまいらするのである。

たとき、私は真に私のためにこのお話があつたのであることを覚えた。

その時の先生の御教は始めから終りまで唯一貫に浄土を告げてくださった。——二十九種の浄土莊嚴、何一つとして法蔵願力の成せる所ならざるはない。吾等有情の罪濁に苦悩する姿をみそなわし、哀れ救わずにはおかじと同悲したまう御誓いこそ、遂に浄土を建立し莊嚴せられたのである。其処なる花も鳥も樹も草も池も水も宮殿も樓閣も一にこれ吾等の罪濁を浄め苦悩を救わんとの遣る瀧なきお慈悲の顕現ならざるものはない。如来かねてより吾等の煩惱熾盛罪惡深重、いつも／＼苦悩に流転する様をみそなわし、必ずこれを救いて無漏清浄の身とならしめんとて、五劫に思惟し永劫に修行し、積功累徳、彼の浄土を建立し莊嚴して吾等を招き呼びたまう。その遣る瀧なきお慈悲をよくよく聞きまつるとき、罪深ければこそ、悪重ければこそ、いよ／＼往生の望み確かなのである。まことに久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里は捨てがたく、未だ生れざる安養の浄土は恋いしからず候うこと、まことによく／＼煩惱の興盛に候うにこそ、名残りおしく思えども娑婆の縁つぎて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり、いそぎまいたりたき心なきものをことにあわれみたまうなり。この遣る瀧なきお慈悲の凝り固まりて成れる処であればこそ、お

慈悲に腹ふくれたるたちどころに浄土の往生は自然なのである、——それはこうして筆を執っている今からもう凡そ二十余年も昔の事であった。私は今は先生のお言葉を一語も記憶してはいない。けれどもその時の深い肝銘は、これを憶い起こすとき、私の心の中に略ぼこの如き思いを浮び出でしめるのである。

これによって私は近角先生から親しく浄土を告げられたそれは然し先生が不断に繰返し／＼お告げ下さる如来の本願と全く同じものである。煩惱の我等を愍みたまう遣る瀬なきお慈悲の癡り固まりて成就したる処である。お慈悲の外に浄土があるのではない、お慈悲を聞きさえすれば浄土の往生は自然なのである。先生が平常妄りに浄土を説かれないのは、私共が先後を顛倒してしまつて、真実にお慈悲をいただくことができず、真実の報土に参ることができなくなるのを憂いたまうからであらう。極楽はたのしむときいて参らんと願う人は仏に成らず、弥陀たのむ人は仏に成る、という蓮如上人の教もある。浄土を先に頭に入れてしまつと、念仏は其処へ往くための手段になつてしまふ、如来の本願も私の快樂の用具に使われてしまふ、信仰も向利に過ぎなくなつてしまふ。これ恐れても恐るべき一大事である。先生は私共の信をあくまでも純淨ならしめ真実に徹せしめんと憂いてくださった。その深い御親切からみだりに浄土を語られなかつたのであらうか。もとより先生御自

随時随想

宿縁

私がかく年をして之というものも持たないが、ただ不思議にも人生に目を覚され、迷うことなく生き来たつたこと唯一つあるのです。

元は体も心もひよろ／＼だつた。今日まで健康など顧慮せずに来たが、またどうにか仕事も出来、好きな山も歩けるそれには訳がある。心に信の蕊棒が立ってしゃんとし、くよ／＼迷わず、従つて体も幾分健康になつたことです。それはそも／＼蕊棒である信の眼を開かせ大安心させて頂いた近角先生の賜物なのです。だが私をそこに導き入れてそう歩ませたもの、そして機縁に出あつたからに他ならぬい。

願みるに、幼時父の話してくれたこと、即ち碩学の叔祖父たる真峨法師の歩んだ道、その精神が指標になつたのだと思うのです。真峨さんは単に藏経を二度繙いたとだけではなく、念仏を喜び、その念仏に生き、そのみか唯一の光だと説いたという一事が腹のしこりとなつたようです。

身にあつては、弥陀の本願を信じて念仏するところ、浄土の往生は自然法爾の事として深く味わつて居られたことである。或はむしろ、先生が常に私共に語つてくださった通りに、親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せをこうむりて信するほかに別の手細なきなり、念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり、たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候、という純粹無雜なる境地に住し、ただ一向にその境地に住じ、ただ一向にその境地をお伝えくださる以外に何もなかつたこととうかがうべきであらうか。そしてこの純粹無雜なる一念の信の中にこそ真実に自然に浄土の往生は証される事なのであらう。このことは先生の著わされた「親鸞聖人の信仰」や「慈光録」等を通してうかがわれることである。

これによって私の数年にわたる何となき疑いは解かれたまこと弥陀の本願を聞いて念仏するところ浄土の往生の信たしかにして、随つて浄土の慈悲の事さえ問題とならなくなつてしまふところ、年齢の加わると共に造悪積悪いよいよ深重なるままに地獄に墮つる他無き身がただこの如来の本願のやるせなき御仰せに救われまいらすばかりである。

(未完)

柳瀬留治

真峨法師はそのため、称名正因だ、異安心だとの非難をうけ、本願寺で幽閉された由です。たま／＼試みに講説させて見ると、正しく法然上人が親鸞聖人に伝えられた念仏の本意そのもので許された由であります。

法然上人は「往生の業、念仏を本とす」と仰せられた。即ち妄雲に閉ざされて、信することも念ずることも能わぬ飢えたる者に与えんがための念仏のお粥だと仰せられた。恐らく真峨法師もそれ一つを喜んでの一生であつたであらう。私は家食しく、心が薄弱でとても世に立てないから、信を求め心の糧にと思い煩悶し、近角先生の下に走つたのです。思えばそした歩みをせざるを得なく、かくせしめたもの、それは父を通した真峨法師であり、然も近角先生の在世にぶつかり直々のお導きを蒙つたからです。不思議な機縁の催しという外はない。

親鸞聖人は教行信証に「たま／＼行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と申された。誠に遠く大なる宿縁に驚くのみです。

ふにゃ／＼のこんにゃくも串に刺されてピンとする如く骨なしと父に言われた私も信に遇ってはじめて心がシャンとし仕事も勉強もそれから出発したので。

今そした立場で過去を顧みると、ふにゃ／＼の心も、体も、煩悶したことも、又七十年にわたる失策の連続も一として無駄でなかった。皆、今日の己に生きて来、意義を与たらしめていると思ふのです。即ち価値のない己に価値を与えられたがため人生すべてに意義を生じ、価値化されたわけです。

禅家の悟りもそれであるまいか。「衆生本来仏なり」とはいえ、己の壁に突きあたって進退谷まわって悩むのです。碧巖録や無門関を読むと、断乎として破れぬ己の壁たることが知られ、それ自体が本来のもの、それを除いて仏はないことが悟られ、勇躍歡喜するようです。矢張り宿縁だと思ふのです。

偶感

(四一、七、草原誌)

……存在の凡てが因果の法則に支配されて生じ、或は滅する、私達の偶然と思ふことも気付かぬ所に必然さがある。世の賢人聖者は別として我々凡人はこの因果の支配下にあつて常に苦しみ悩んでいるのです。この因果の渦から身を脱せしめられるところに仏教の救いがある。

生死の巖頭

(一)

花田正夫

私が岡山の医学生だった頃、病院に群参する病人が、全快して周囲の人々に祝福されつつ、満面の笑顔で元気に退院する人々と、裏門から金色の自動車に迎えられて音もなく消えて行く人々に度々接した。その度毎に省みさせられることは、医学の限界を越えた人々のところということであつた。

「人間は生れた限り一度はどうせ死なねばならぬ。人間の力や寿命には限界がある、あきらめるより仕様が無いじやないか。せいぜい平素から健康に気をつけて、生きている間は愉快にくらすのが何よりだ。死んだらローソクの灯が消えるのと同じさ。孔子聖人でさえ、生の従来するところを知らず、いずくんぞ死を知らんや、と手を挙げて居られる、そんなことを考えたってラチのあくものではない……」
という常識論もある。然しこれは死を他人事とし、自分はまだ「大丈夫だと、自身の健康の上にあぐらをかいた人々の常識である。自分がその当事者となり、死に直面す

禅の古典『無門関』の第二則に「百丈野狐」というのがある。中国の唐代のこと、百丈禪師が或日法座が終つても残っている一老人に声をかけた。彼はかつて一禪師として衆に「不落因果」を説き五百生の間狐となつた。即ち彼は問うた「大修行底の人還つて因果に落つるや、また無しや」師曰く「不味因果」と。この一語で老人即座に悟つて成仏した。百丈の答えた「不落因果」とは「因果の法則は釈迦も弥陀も味ますことは出来ないぞ」なのです。彼は前に大悟徹底せずして「不落因果」即ち「因果の法則を免れる」と説いていた罰で狐に生れたのです。

この公案のあと無門慧開禪師は「不落因果といつても、不味因果といつても大悟の人が言うと同じだ、生悟りの者だと不落と言つても不味といつても理智だから間違いだ」と説かれている。

これを念仏他力の信味からいふと、因果の渦に巻込まれてあえぎ、出離の縁なき我々は、不味因果の有様であり、脱れ難く悩んでいる我々を憐む大悲のみ心は「さぞ辛いだろう大願業力の我に任せよ」と声をかけられ、己を捨てて「任せ奉る」とき、始めて渦から抜き取られて不落因果となるのです。そこに永劫の流転を免れるのです。

(四一、三、草原誌)

る時それでよいのであろうか。

医大の卒業前に亡くなつた、友の最後のささやき「僕は医師となつて病者の治療を願つて来たが、その僕がこんなに早く駄目になるうとは！」との悲痛な声は今なおお耳底にひびいてる。

長塚節氏が喉頭結核と診断され、余命一年との宣告を受けた時の歌に、

生きも死にも天のまにまにと平らけく思いたりしは常
の時なりき
我がいのち惜しと悲しといわまくを恥じて思ひしは
みな昔なり

と、生死巖頭に立つての述懐がある。誰もそうなりたくないし、また考えたくもないことながら、この一大事は一人々々直面せねばならぬ、誰にも代つて貰うことも、一緒して貰うことも出来ない。

私は今、生死巖頭に立たれて、死の淵を越えて行かれた

方々の教えを仰ぎたい。最初に四十一で肺疾で亡くなられた清沢満之先生を憶う。

一、清沢先生

明治三十四年六月に御長男、十月六日に御令閨に先だたれ、先生また病漸く重く度々咳血さねるなかを本山問題の風雲急なため東上して浩々洞に居られた頃である。安藤師は三十五年の八月、暑中休暇になつても帰省する旅費もなく、浩々洞で留守番をして居たことが幸して、先生の薫陶を親しく受けられた。以下安藤師の述懐。

誰かの歌に

為すこともなくてこのまま死ぬるか病める我が友

男泣きに泣きぬ

というのがありますが、実は私も二十七八才の頃肺炎カタルにかゝり、死生と功名との問題に相当に悩まされました。この病がいよゝ癒らず、これで死ぬるのかと思えば誠に残念で堪えられぬ。私が二十九才であつたかと思ひますが、東京の東片町の浩々洞で、明治三十五年の八月の或る夜、自分の苦悩を打ちあけて、先生の教を仰ぎました。しかし私の苦悩というのは、約めて言えば二点に帰します。一は罪惡観で、一は生活問題であります。内面からは罪惡観で苦しめられ、外面からは生活問題で苦しめられました。

又先生曰く。

「世人は我等を非難して、宗教家は、唯死の問題ばかりを説いて現在の愁苦を救う道を説かず。吾人は死の問題はどうでもよい。死後の事は、有るとも無いとも知る能わず。またかかる事を知る必要もない。吾人の苦しむ所はパンの問題、妻子死別の問題、侮辱に対する安慰、憤怒に対する慰藉、落第の事故、破産の事故、人に罵られる苦痛、人に疑われる苦悶である。是等現在の憂苦に対してその慰安の道を説かず、死の問題について安心せよ、死を恐れざるの境に至れと。然し死の問題は最早や聞き飽いている。かかる無用の宗教談を聞く要なし云々と。これは浅薄な疑問である。猛然と反省すべきである。何となれば死の問題の解決を得ないで現在の苦悶を除きにかかるのは不可能である。世間現在の憂苦を根底から審査すれば皆死の問題に到着する。種々の煩悶を一掃するには死の問題の解決が先である。

死を恐れない人に向つて、商売の損失、他人の誹謗、侮辱と破産、別離と疾病、何かあらんである。

古来の高僧偉人が先ず第一に死を問題にしていられる。エピックテラスが『Door is open』死の門戸は常に開いている、余は何時にても死することを得る』と云うてい

先生が申されるのは

「貴君の先刻よりの話を聞いてみると、苦悩は種々であるが、一言すれば死ぬることが恐ろしい」ということになる。そこがソクラテスが「真の哲学者は死の問題を研究すべき者なり」という所以である」

と。この一語を承ったとき、私は頭から冷水を打ちかけられたような気がした。そして清沢先生の人物の荘嚴さにくうたれました。従来宗教の話は、多くは死後の問題であつた、そして現実の苦悩については何等の交渉がなかつた。死後に浄土に生まれるということが主題であつた、もとより死後の事は大切であります。然し当時の私は、死後のことよりも、現実の人生において、死の問題に追われるのが恐ろしかったのであります。

この夜先生の教を聞いて、今までの学問は一つも役に立たぬ、砂上の楼閣で、一陣の風に吹倒されるという有様でありました。また先生御自身が肺患で、須磨の海岸で病を養われながら、濤声松風の中に、人生問題や妻子の行末を案じて、煩悶に煩悶を重ねられた実地の経験の上から「死生の超脱はなかゝ困難、安心立命は真にむづかしい」と言われました。私はこのむづかしいの一語を非常になつかしく思いました。今まで信仰が定まらぬとて決して恥ではない、真の求道はこれからであると思ひ定めました。

るのは、人生すべての煩悶の最後の解決をしているものである。」

以上、清沢先生が常に死の解決を大切に説かれたのも、先生御自身が、死を何時も前にして居られ、そこに開かれた死の門戸を持っていられたからである。御辞世の句は

血を吐いて病の床にほととぎす

二、池山清夫人

△明治三十六年六月五日▽

池山夫人は大正六年、死の宣告と同時に信のよろこびを近角先生に次のように述べられました。

「私事、かねてレウマチスにてなやみ居りましたが、七月以来非常に胃が悪くなりました。それも矢張り服薬の作用であろうと思ひ、医者より健胃薬などもらいして居りましたが、益々瘦せるばかり、食事も漸く一せんやと頂く位、あまり衰弱いたしますので病院で診てもらいましたら、胃腸とのこと（あからさまにそれとは申しませぬが）それをさきました時の私の失望、何とも申しようがございませんでした。八十六の老母、及生母も七十余の老人をあとに残し、五人の子供のあとゝの始末、主人のこの後の不自由を思いまして実に上気いたさん許りでした。

しかしどうぞ御安心下さいまし。この刹那の非常の失望と同時にハット如来のお慈悲と申すことに心づき、ア、もう、なつかしいと申したところで共に暮らせるものはなし、もう手をひいて下さるあなたにお任せするより行く処はないと心づくと共に、胸も張り裂けるほどの切なさが、スーッと開けて、ア、この病気が万一主人であつたらどうであらう、財産は無し、老人子供を抱え病夫を抱え長い間には収入の途も絶え、そのむごたらしさは如何ばかり、ア、私であつてこんな喜ばしいことはない、是も皆おはからいによる処と、スッカリ元氣も直り平氣で病院より帰って参りました。

併し帰宅後、主人、寿夫、らく子に右の次第を申しましたところ、その歎きは非常に御座居まして、主人は今までの苦勞を氣の毒と申し、子供は我がままばかりして誠にすみません、ゆるして下さいと申しては泣きますし兩三日と申すものは、どうもこうもならぬ程でしたが信仰の有難さ、主人もスッカリ思い直し、この頃では最早私は死したるもの故、一日々々と生き延びさせて頂いている、ア、有難い事と喜んで、養生と服薬とを怠りなく致して居ります。

病院ではこの冬中いかかと申したのだそうですが、私の立場と致しましては、明日であろうと、また、半年後で

苦しみたくない、苦しみを覚えて皆を悩ませたくない。

未来のことなど何とも思つた事はありませんよ。矢張り歎異鈔の通りです。併し今この通りお助けに預つて居ればこそ気分だけは、この様に元氣でお慈悲に護られて目を過させて貰つて居ります以上、未来も決してお見捨て下さらぬと確信しています。遠からぬうちに、皆と別れを惜しみ力なくして終る時が来ると信じて覚悟して、います。お念仏はすべての事をよき様に解決して、今々々々を慰めて下さい、ます云々」と語られました。

又大正七年の一月に近角先生が池山夫人をお見舞になつた時、皆の人が「不思議じゃ、只事でない」と夫人の喜びが大きいのに驚いてまるで嘔し立てているような氣楽な話になつていて、今癌で逝こうとする人の心持を汲んでいないのを叱られて、次の法話をせられました。

「撫順の炭坑の爆発で一命を捨てた向坊さんは日頃から強信のお方であるが、突然爆発に遭うて人事不省になつた其時、しまつた、と大声を發したそである。幸にその声を聞きつけて色々手当を続けた時、南無阿弥陀仏々々々で息を吹き返して来た。普通あれ程喜んで居る人が南無阿弥陀仏ならとにかく、しまつたと言つてたおれた

あろうと変りありませぬが、子供の為には、一日でも長く居る方がよろしくと主人も申して居ります。

……生前今一度お目もじ致し、親しくお物語り致したのですが、何を申すも遠方のこと、幾十年の後には、又親しくお目にかかれることと楽しんで居ります。不時の死と申すことも世間には多いのに、かくも夫婦親子心のかぎり名残りを惜しむことも出来、又心の底から打ちつけて、あなたの御慈悲をよろこばせて頂くことの出来ると申すことは何たる幸と、主人とも喜んでその目々を愉快に元氣に暮して居ります云々。」

其頃、先生の導きをうけていられた輛の松江岩人師が、見舞われて、夫人のお喜びと落付き、死を見ること帰するが如きお様子に驚かれて

「歎異鈔には、久遠劫より今まで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、未だ生れざる安養の浄土はこいしからず候ことよく、煩惱の興盛に候にこそ……とありますが奥様の御様子では浄土の近づく事が喜ばれましょうな」とたずねられると

「いいえ、すこしも死にたいことはありません、一日でも生き延びたいです。主人のため、老母たちのため、子供等のため生きねばなりません。生きる以上は成るべく

のはおかしいと思われ易いが、よく考えて見ると、しまつた、より外この時出ぬはずである。我々が病氣でたおれる時も同様である。しまつた、より外ない筈である。処が、かくしまつた、残念だと叫んで死ななければならぬその残念さを、さぞ残念だろう、その汝を何処までも見捨てぬぞ」とこのお慈悲が聞えるもの故、心の中に、有難い、とそれで死ぬ故、心の中が南無阿弥陀仏、従つて目が醒めたとき南無阿弥陀仏が出たのである。云々」このお話を聞いて意外に夫人が大層喜ばれて

「実はこの間からひどく腹が痛むと、折々念仏しようにも出来ぬことがあります。たとえ念仏が出来ぬとも、お見捨てなきお慈悲で、必ず参らせて下さることは頂いて居りますが、今のこの有様では愈々の時どんな有様で引きとらせて貰えるか。皆の人から大往生遂げるものもの如く思われていて、自分は構わぬけれども、いらぬことで人に誤解を与へはせぬかと氣になっていました。処が今、しまつたの一言しかないのが本当と承つて、初めて安心しました。どんな有様でおわらうと、皆が案じることはならないことが分つて大変らしくなりました」とお礼を述べられました。

大正七年五月三十一日の池山先生の近角先生宛の信仰書

簡を読ませて頂きますと、奥様の御最後がまぎ／＼とうかがわれます。

老兄

とう／＼往きました。病症がわかってから半歳余になりました。しみ／＼と名残りを惜しませてもらいました。

が、遂に名残りはつきませんでした。妻の死ぬ数日前のことでした、急に今迄に覚えぬ胸苦しさを感ずると、これが臨終ならんと申し、傍に居た私の腕をひしとわが胸に抱き、枕頭に侍していた娘に向い、一つ二つ心得となるべきことを云いきかしました時は、一滴の涙が頬を伝わりました。腹水をとって身心ともに楽になってからは、どうかこのらくのうちに早く往きたいとよく言ったものでしたが、その当時は気づきませんでした、今になってその有様を思い浮べますと、あれがすなわち、名残り惜しく思えども娑婆の縁つぎで力なくして終るとき、であったと思いません。しかしその時は幸に落着きまして、病人はまだ死ねなかつたと笑いながら申したことがありました。

その頃のことでした、老兄に法名をつけていたきたいとお願ひしたのは。

おもえば不思議です、私とその手紙を書きましたのは夜半のことでしたが、何か心せくまに、ありあわせの二銭の切手を二枚をはって、すぐ俵をやって投函させたのであったのだらうから、御前は猶更のことであらうし、私も今は思ひおくことが無くなった。実に百万の富をいただいたよりも有難いことで、もう何時なん時往ってもいいよと申しましたら、妻も大いに喜びまして、こんな嬉しいことはない、どうぞ御書を大切に保存して下さいとくれ／＼も申しました。

どうでしょう。苦惱の有情を捨てたまわざる浄土の慈悲の御心の発動は、我等夫妻をして、今生の哀別離苦をさえ忘れしめ、たちがたき恩愛の絆をすくたれました。ああ何たる偉大な御力でしよう。

その夕べでございました、妻は病床に身を起させまして庭の面を眺めながら、氷じることを目の前でこしらえさせていただきました（死ぬ前には氷じることを食べさせてもらうと、数日前に言ったことがありました、後に思うとその通りになったのです）食べ終りまして、ああおいしかった、寝かしてもらいましょう、と云って、横になるや、間もなく咽喉部に妙な喘々という音がきこえましたので、私は変に思つて、どうしたと云いますと、楽です、と答えましたので、それでもなんだかここに（咽喉に手を触れて）妙な音がするではないか、と重ねて申しますと、妻は従容として、これが臨終でしょう、と申しまして、医師を迎えにやるのもとめた位でした。それから種々に手を尽しました

りました。老兄が私の手紙を見て電話でお願い下さったのは、光演台下が浅草お立ちの前僅に数分であつたと仰言るではありませんか。もし私が翌朝投函させたなら少くも一便はおくれますから、到底生前に台下より法名を頂くことはなかつたでしょう。台下は恐らく御帰浴後直にお見舞状、併びに法名を認め送らせられたことと思ひます。この御親翰と法名とを頂いたのが朝で、その夕が臨終であつたとは、ああ何たる有難きおはからいでしよう。

御教書を頂きました時、私はじめ一家の者は踊躍歡喜しました、病妻は諸根悦予の態でした。午後医者が見えまして今日は衰弱は幾分増しているにかかわらず、非常に元気がよるしいように見受けると、不思議がつて居られましたので、私が実は今日これ／＼のことがあつて大変よろこんでいると申しましたら、それでこそと申されたような次第で、何のことはない、一家はきわもなき法身の光輪につつまれ照らされた光景でした。

私は妻に言いました。お前はこの頃／＼もう、しておきたいと思ふことも出来るだけして仕舞つたから、何も思ひ残すところはない、どうぞ身体を楽なうちに往きたいもの／＼とよく云うが、私は夫として、父として一日も長く居てもらいたかつた。しかし今日という今日は、有難い御消息をいただき法名までも賜つた、願うてもない幸に遇わせてい

がその甲斐なく翌朝四時頃に息を引取りました。

あゝ、亡妻は私と共に長らくの間、親身も及ばぬお世話を老兄から頂きました、亡妻は生前老兄の御親切に感泣して居りました。謹んでお礼申し上げます。

御親翰の中にある「さりながら人の世は皆春の雪」という句と、老兄の御来示の「恋しくは南無阿弥陀仏を唱うべし、われも六字のうちにこそすめ」の歌は、私の此頃しばしば口誦むところであります……。

大正七年五月三十一日夜

池山榮吉 頓首

— 未 完 —

香 婆 の 薬 童 子

医王の香婆が人の病を治するには薬草をとって童子を作る。その形はなほ端正にして世にまれなり。生れたばかりの童子に同じ、行住坐臥自在なり。故に病人来ればこの薬童子と遊ばす。

すこし力のある病人は童子と共に行きつもどりつしてたわむる。又坐する病人にはともに坐し、病重くして寝ている病人には薬童子を抱かせる。かくしているうちに自然に薬の功があらわれて、万病治せずということなし。

（大宝積経八）



あとがき

松代地震、集中豪雨の頻発、そして台風
の発生等々、引き続くうちにも清涼の秋気
が訪れて来ました。野面は黄に、柿の実は
赤く彩どり、ものみなのみるこの頃、私
共も心のみりの秋を迎えましょう。

○ ○ ○

聖人は「撰取不捨の故に正定聚に住す」と申されましたが、撰取不捨の意義は重大であります。世間一般には、よいところを認めて援助の手を延べますが、一度悪しきところが知られると捨ててかえりみません。その程度の差はありましても、所詮限りある人の間では、魂別かれするのがおちであります。更に無常の嵐の中ではないおことであります。こうした私共は、仏陀の撰取不捨の御手の真意義を知らされまこととは無上の光栄であります。近角先生の御言葉をくりかえし頂きましょう。

白井先生のお原稿は、近角先生御往生の

翌年四月に書かれたものであります。二十五年を経ました今日、改めて掲げさせて頂き、先生の面影をあらたにさせて頂きます。近頃朝日新聞などにもしきりに『出会い』ということ唱えて「まのあたり先師を見る、これに逢うなり。正法眼蔵」を引用し、その体験談を掲げておりますが、白井先生の近角先生へのめぐりあいはまことに尊い限りのことでもあります。

柳瀬様の随想は、短歌草原誌の巻頭言から頂きました。蓮如上人は、お歌を作られて「転法輪の因、讚仏乗の縁ともなりぬべし」と述べておられますが、柳瀬様の作歌の心が仏心のまことからひらかれる心の花を中心にしていられるのに何時も啓蒙をうけております。

「生死の巖頭」の問題は、何時も心にかげながら六十二才の今日までに教えられたことを掲げさせて頂きました。良寛師は、貞信尼に「うらを見せおもてを見せて散るもみじ」と告げたと、「良寛に辞世あるかと人問わば南無阿弥陀仏」とうと答えよ」といったとも伝えられますが極く自然の姿、力まず、飾らず、ありのまゝに念仏の息絶えられた方と思えます。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午後一時、一道会例会。

※ 市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目左入ル。

電話 名古屋八二一七〇三七番。

○ 毎月二十四日、午前午後。

昭和区小桜町、教西寺法話会

※ 市電、御器所通り下車。

桜花学園東側。

定価 半年 二百円(送共) 一年 四百円(送共)

名古屋市南区駆上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話 八二一七〇三七番

愛知奥西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駆上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番